

**【原著論文】 青年期における親準備性に対象関係が与える影響  
— 自立を媒介として —**

**水 野 安由加**

金城学院大学心理臨床相談室

**Effects of Object Relations on Readiness for Parenthood in Adolescence:  
Independence as a Mediating Factor**

**Ayuka Mizuno**

Kinjo Gakuin University, Counselling Room

This study used structural equation modeling to examine the influence of object relations on readiness for parenthood through independence in adolescence. The subjects for analysis were 262 university students. The participants completed questionnaires assessing their object relations, readiness for parenthood, and independence or self-support. It became clear in general, that lack of interpersonal relationships and high anxiety of being abandoned hindered readiness for parenthood. However, high levels of self-control alleviated that inhibition. It was also shown that tenuous interpersonal relationships reduced social interest. When gender differences were examined, independence was a mediator for women, but not for men. The women's models were close to the overall models. In women, weak interpersonal relationships and high abandonment anxiety impeded parental readiness, but it was also suggested that parental readiness increased through self-control. For men, self-control alleviated weak interpersonal relationships and high abandonment anxiety. However, self-control did not affect parental readiness in men, though the hypothesis in this study was that independence would be a mediator. This suggests that men may not have an image of having a good family or raising children even if they become independent as an adult. For modern university students, building a stable relationship with a partner may be more important than independence as the first step toward adulthood and developing readiness for parenthood.

Keywords : readiness for parenthood (親準備性)  
object relations (対象関係)  
adolescent (青年期)

## I. 問題

### 1. 現代の若者の結婚観や子育て観

少子化が進んでいる日本において、内閣府（2020）は国民に対し、自分が40歳ぐらいになった時結婚していると思うかについて調査した。その結果15～30歳では約5割の人が「そう思う」「どちらかと言えばそう思う」と回答した。また黒谷（2011）は、仕事を続け育児をしないと考えている女性は仕事と育児の両立のための施策や支援に不安を感じているため、育児に前向きではないと示している。そして、親になるための動機づけや心理的準備が不十分であると、子どもを持つことに対して消極的となり、実際に親になった時に子どもへの適切な関わりが営めないのではないかと指摘されている（諸井ら、2013）。さらに、子育てにおける深刻な問題として児童虐待の増加がある。児童虐待の保護者側のリスク要因の一つとして、保護者が未熟である等から育児に対する不安やストレスを抱えていることが挙げられる。（厚生労働省、2013）。これらより、親になる前に子どもや子育てへの理解を進めることが必要であると考えられる。

### 2. 親準備性

このように親への動機付けや心理的準備を行っていくことが、将来子育てをする際の助けになると考えられる。親になることに対する意識について親準備性と呼ばれている（服部、2008）ものがある。

親準備性という概念・用語は、岩田ら（1982）の研究によって初めて示された。岩田ら（1982）は、「望ましい親行動の遂行に必要な、プレ親期（青年期）における、価値的・心理的態度や、行動的・知識的側面の準備状態を意味している」と設定した。親準備性の研究は家族のあり方の変化とともに様々な視点が入り、定義が少しずつ変化してきた。服部（2008）は親になるという資質の観点からだけではなく、現代の青年自身が親になるということをもどのように意識しているのかという観点から親準備性についてとらえた。その結果、「親になることの意義」、「子どもの養育」、「親になることへの負担感・不安感」、「親になることへの要件」、「世代の継承」の5つを抽出した。

また、世の中の変化とともに青年期の位置づけも変化してきている。現代では結婚しないという価値観を持つ人の増加や、結婚し、親になる年齢が上がっていることから、青年期をプレ親期とするのではなく、自分自身の人生をどう生きていくかを模索する時期と再定義することができるのではないだろうか。時代とともに人生について模索する時間が長くなっているのではないかと考えられる。

### 3. 対人関係と親準備性の関連

そこで、親準備性を育む要因としては何があるかについて検討をしていきたい。これまでの研究では、青年期の男性は父母との良好な関係が乳幼児への好意性を高め、育児に対する忌避感を弱めることが示されている。一方で、青年期の女性は母親との良好な関係が乳幼児への好意性を高め、育児に対する忌避感を弱めることが示されている（小林、2014）。また、青年期の男女において友人と互いに心を開き支え合い、内面的な深い関わり方をしていくことが明らかになっている。（高峰・吉川、2015）。さらに、自分を認めてくれる存在や前向きな存在といった自分に興味を持つ肯定的な他者の存在が、親準備性を高める要因になることが解明されている（松本・重橋、2018）。

以上で述べたように、親準備性を高める上で大事なものとして、その人にとって重要な他者との関わりがあげられる。精神分析の中で、自己と対象（他者）との関係を表現している対象関係というものがある。これは自我の機能の一つとして、早期からの記憶痕跡の蓄積によって構築され、いったん構築されるとその後の子どもの心的体験を組織化するシステムとして機能する（藤山、2002）。井梅ら（2006）の青年期用対象関係尺度では、「親和不全」、「不安定で希薄な対人関係」、「自己中心性」、「一体性の過剰希求」、「見捨てられ不安」の5つが抽出された。

対象関係と親準備性の関係について、青年女性は見捨てられ不安が高いほど、そして、親和不全と希薄な対人関係の得点が低いほど、肯定的な子育て意識を持っていることが示されている（井梅、2019）。

#### 4. 対象関係と自立及びアイデンティティの関連

青年期における重要な他者との関係は、親準備性に影響するだけでなく、精神的な健康や適応、大人になるにあたっての自立やアイデンティティの確立にも影響を及ぼす可能性が考えられる。

自立について、これまで多くの研究の中で精神的な面に着目されてきた。水本・山根（2011）は適応的な精神的自立とは、「親から心理的に分離して親と信頼関係を築き、親と対等なおとな同士の関係を築くことである」と定義した。本研究では自立と親準備性の関連についても解明するために、自立を精神的なものではなく、「自分で生活を営むために必要な能力があることや社会の一員として生活することができること」と定義する。

これまでの研究では、青年期の男女では両親から心理的に分離していると自立していることが示されている。一方で、両親と信頼関係を築かず心理的に分離していないと、自己の価値観を確立し自分の能力や個性を認めていこうとする主体性が低くなることが示されている（水本，2018）。また、主観的なアイデンティティの側面は養育者との関係性と関連し、社会的なアイデンティティに関しては友人や恋人との関係性が関連することが示唆された（川本，2015）。

#### 5. アイデンティティ及び自立と親準備性の関連

青年期はアイデンティティを確立する時期であるため、青年期の男女にとって自立をすることや大人として成長することは、自分が将来子どもを持つことに影響を与えるかもしれない。

中嶋・後藤（2009）は青年では子育て経験がある男女に比べ、親になることへの負担感や不安感を抱いているという特徴を明らかにした。これは、子育てのイメージから親になることへの意識が形成されているためであると考えられている。また、アイデンティティの基礎となる基本的信頼や自律性が十分に確立されていない青年期の男女では子育てへの負担感や不安感が強くなることが示唆された。

芹田・宮崎（2019）によると、青年期女子では母子関係における精神的自立という面では、母親との信頼関係が築かれることが親準備性に有効であるこ

とが示された。また、自分の母親が今、母親であることを楽しんでいるイメージを持つことが、親の良いモデルとなり、親準備性が高まることが明らかとなった。

以上のことから、子育てをする前の青年が親になることへの意識を育てることで、将来自分が子育てをすることへの動機づけになったり、子育てをしている人への理解に繋がったりすることが考えられる。それは子育て世代への助けにもなるかもしれない。

## II. 目的

本研究では、親準備性を高める要因を明らかにするために、対象関係と自立に着目する。親子関係だけでなく、友人や恋人など重要な他者との関係が自己の確立や自立を媒介にして、親になることへの意識へ与える影響を解明することを目的とする。

仮説として、重要な他者と適応的な関係が築けている人や、自己と他者の分化ができている人は、自立しており、自立していると、親準備性が高いと考えられる。

## III. 方法

### (1) 調査対象

大学生、大学院生の男女262名（男性104名、女性156名、その他2名）を分析対象とした。平均年齢は20.96歳（SD=1.09）であった。

### (2) 調査時期

2022年6月～2022年8月

### (3) 調査方法

質問紙による調査

### (4) 調査内容

#### ①フェイスシート

性別、学年、年齢、尺度以外に親準備性に関連すると考えられるものについての質問、住居形態から構成した。

#### ②対象関係

青年期用対象関係尺度（井梅ら，2006）を使用した。この尺度は下位尺度が「親和不全」6項目「希薄な対人関係」5項目「自己中心的な他者操作」5項目「一体性の過剰希求」6項目「見捨てられ不安」7項目の5因子29項目から構成されている。6件法

でおこなった。

### ③大学生の自立

大学生の自立尺度（大石・松永，2008）の中から親準備性に関連のある因子を抽出し，使用した。下位尺度が「セルフコントロール」10項目「社会的関心」3項目「自立的な生活」3項目の3因子の16項目から構成されている。5件法でおこなった。

### ④親準備性

親準備性尺度（服部，2008）に親準備性尺度（伊藤，2003）を取り入れ，再構成した。この尺度は下位尺度が「親になるための意識」14項目「親になることの意義」9項目「親になることへの負担感・不安感」6項目の3因子29項目から構成されている。5件法でおこなった。

## IV. 結果

### (1) 親準備性に関連すると考えられるもの

「あなたは今まで，ある特定の人と恋愛関係になったことがありますか」という質問に対して，59.9%が「はい」，40.6%が「いいえ」と回答していた。「あなたは将来，結婚したいと思いますか」という質問では，41.2%が「はい」，33.6%が「どちら

かと言えばはい」，13.7%が「どちらかと言えばいいえ」，11.5%が「いいえ」と回答していた。「あなたの周りに子育て中の人はいますか（※小学生くらいまでを想定しています）」という質問では，33.6%が「はい」，66.8%が「いいえ」と回答していた。居住形態については，「実家」が68.7%，「一人暮らし」が21.8%，「寮/下宿」が9.5%，「その他」が0.4%であった。「あなたは赤ちゃんが好きですか」という質問では，40.8%が「はい」，40.1%が「どちらかと言えばはい」，11.8%が「どちらかと言えばいいえ」，27.6%が「いいえ」と回答していた。「あなたは小さな子どものめんどうをみたり，遊んだりするのはめんどうくさいと思いますか」という質問では，8.8%が「はい」，23.3%が「どちらかと言えばはい」，32.1%が「どちらかと言えばいいえ」，36.3%が「いいえ」と回答していた。

### (2) 各尺度の検討

#### ①対象関係尺度の信頼性の検討

尺度の信頼性を確認するため，因子ごとにクロンバックの $\alpha$ 係数を算出した。「親和不全」では $\alpha = .80$ ，「希薄な対人関係」では $\alpha = .80$ ，「自己中心的な他者操作」では $\alpha = .74$ ，「一体性の過剰希求」

Table 1. 自立項目の因子分析結果（主因子法・プロマックス回転）

項目	I	II	III	共通性
第1因子：セルフコントロール ( $\alpha = .84$ )				
IV-4 周りの人とよい関係を維持することができる	.77	-.09	-.09	.53
IV-5 相手の気持ちを察して，適切な対応ができる	.71	-.09	-.12	.44
IV-2 自分の居場所がある	.69	-.20	-.16	.40
IV-7 親は自分のことを信頼している	.58	-.04	-.06	.31
IV-11 自分の感情を自分でコントロールできる	.56	.11	.00	.35
IV-8 社会の一員としての自覚をもっている	.53	.02	.24	.44
IV-6 自分の言動に責任をもてる	.52	.13	.05	.35
IV-12 自分のことは自分で判断する	.50	.16	.06	.36
IV-9 自分で決めたことを行動にうつせる	.44	.14	.13	.32
IV-14 自分の健康状態に注意を払っている	.40	.12	.17	.29
IV-1 規則正しい生活をする	.37	.14	-.03	.17
第2因子：自立的な生活 ( $\alpha = .84$ )				
IV-16 自分の洗濯物は自分で洗濯する	-.02	.85	-.05	.69
IV-10 日頃の自分の食事は自分で作る	.05	.80	-.03	.65
第3因子：社会的関心 ( $\alpha = .66$ )				
IV-15 日本の政治に関心がある	-.11	-.08	.83	.61
IV-3 社会の出来事に関心がある	.18	-.13	.69	.55
IV-13 新聞を読む	-.16	.09	.48	.23
	因子間相関	I	II	III
	I	-	.28	.37
	II		-	.28

では $\alpha = .78$ , 「見捨てられ不安」では $\alpha = .80$ と一定の信頼性が認められた。

### ②自立尺度の因子分析と信頼性の検討

因子数を3因子に固定し、各項目の因子負荷量がひとつの因子に.30以上、他の因子に.30未満になることを基準とし、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。Table 1に示すように3因子16項目が抽出された。

第1因子は自分の言動や行動、感情を自分自身で管理することといった自己制御に関する項目であることから『セルフコントロール』と命名した。第2

因子は、自分で生活を営むために必要な能力に関する項目を採用し、『自立的生活』と命名した。第3因子は自分のおかれている社会的状況に関心を持つことに関する項目であることから、『社会的関心』とした。また、各因子の信頼性の検討のため、クロンバックの $\alpha$ 係数を算出したところ、「セルフコントロール」では $\alpha = .84$ , 「自立的生活」では $\alpha = .84$ , 「社会的関心」では $\alpha = .66$ となった。

### ③親準備性尺度の因子分析と信頼性の検討

因子数を3因子に固定し、各項目の因子負荷量がひとつの因子に.30以上、他の因子に.30未満になる

Table 2. 親準備性項目の因子分析結果 (主因子法・プロマックス回転)

項目	I	II	III	共通性
第1因子：親になるための意識 ( $\alpha = .90$ )				
II-27 親になったら子どもを育てる自覚が必要だと思う	<b>.77</b>	-.11	.02	.53
II-1 親になることは子どもを守ることだと思う	<b>.75</b>	.07	-.14	.55
II-9 親になると子育てを放棄してはいけないと思う	<b>.73</b>	-.07	-.17	.41
II-26 親になることは自分のことに加えて子どものことにも責任を持つことだと思う	<b>.71</b>	.01	-.01	.52
II-17 親になることは子どもの命や成長、人生に責任をもつということだと思う	<b>.68</b>	.00	-.01	.46
II-5 親になることは子どもに愛情を持ち大切にすることだと思う	<b>.61</b>	.12	-.09	.42
II-4 親になることは子どもを育てる使命感をもつことだと思う	<b>.59</b>	.02	-.10	.33
II-7 親になったら子育てについて学んでいく姿勢が必要だと思う	<b>.57</b>	.08	.06	.41
II-21 親になるためには社会的モラルをもつことが必要だと思う	<b>.56</b>	-.06	.23	.44
II-2 親になることは子どもを、責任をもって育てることだと思う	<b>.55</b>	.08	-.03	.34
II-12 親になったら子どもをしつけたり教育できることが必要だと思う	<b>.55</b>	-.21	.10	.29
II-19 親になるためには常識をもち、世間を知ることが必要だと思う	<b>.49</b>	.09	.15	.37
II-24 親になるためには優しさや気づかいが必要だと思う	<b>.46</b>	.26	.09	.43
II-15 親になると子どもを尊重する気持ちが必要だと思う	<b>.41</b>	.20	.05	.31
II-13 親になると経済的負担があると思う*	<b>.36</b>	-.11	.36	.35
第2因子：親になることの意義 ( $\alpha = .87$ )				
II-25 親になることはかけがえのない喜びだと思う	-.01	<b>.84</b>	-.07	.72
II-14 親になることは幸せなことだと思う	.04	<b>.82</b>	-.14	.73
II-3 親になることは生き甲斐を得ることだと思う	-.14	<b>.77</b>	-.01	.50
II-1 親になることは人生が豊かになることだと思う	-.04	<b>.74</b>	-.01	.52
II-23 親になることは価値ある立派なことだと思う	.09	<b>.62</b>	.07	.46
II-6 親になることは自分のことを必要とする人ができるということだと思う	.09	<b>.55</b>	.22	.41
II-10 親になることは自分が受けた命をつなぐことだと思う	.08	<b>.46</b>	.07	.26
II-8 親になることは自分自身も成長する機会を得ることだと思う	.28	<b>.44</b>	.03	.40
II-22 将来、自分が親になることなんて、考えたこともない (-)	.05	<b>-.41</b>	.12	.18
第3因子：親になることへの負担感・不安感 ( $\alpha = .71$ )				
II-20 親になることに漠然とした負担感を抱く	-.18	.02	<b>.90</b>	.70
II-11 親になることに漠然とした不安を感じる	-.13	.09	<b>.66</b>	.37
II-18 親になると子どもの人生を背負うことへの負担感があると思う	.20	-.06	<b>.49</b>	.36
II-28 親になると自由が制限されると思う	.08	-.15	<b>.43</b>	.24
II-29 親になることは自分の子孫を残すことだと思う*	.06	.22	<b>.25</b>	.13
	因子間相関	I	II	III
	I	—	.50	.41
	II		—	-.09

\*不採用項目, (—) 逆転項目

ことを基準とし、主因子法プロマックス回転による因子分析を行った。Table 2 に示すように3因子27項目が抽出された。

また、各因子の信頼性の検討のため、クロンバツクの $\alpha$ 係数を算出したところ、「親になるための意識」では $\alpha = .90$ 、「親になることの意義」では $\alpha = .87$ 、「親になることへの負担感・不安感」では $\alpha = .71$ となった。

### (3) 下位尺度得点の記述統計量

調査対象者262名について分析するため、各尺度の記述統計量を算出した (Table. 3)。対象関係

尺度は6件法で構成しており、自立尺度と親準備性尺度は5件法で構成している。

### (4) 対象関係が自立を媒介として親準備性に与える影響

#### ①全体について

対象関係が自立を媒介として親準備性に影響を与えるという仮説に基づき、共分散構造分析を行った。有意でないパスを削除し、最終的にFigure 1 に示すモデルを採用した。モデルの適合度は十分な値

を示した (CFI=1.00, RMSEA=0.00)。青年期の対象関係尺度における「希薄な対人関係」は大学生の自立尺度の「セルフコントロール」( $p < .001$ )に負の影響を与え、「社会的関心」( $p < .05$ )に負の影響を与えることが示された。また、青年期の対象関係尺度における「見捨てられ不安」は大学生の自立尺度の「セルフコントロール」( $p < .001$ )に負の影響を与えることが示された。そして、大学生の自立尺度における「セルフコントロール」は親準備性尺度の「親になることの意義」( $p < .001$ )に正の影響を与えることが示された。さらに、青年期の対象関係尺度における「希薄な対人関係」は親準備性尺度の「親になるための意識」( $p < .001$ )に負の影響が、「親になることの意義」( $p < .001$ )に負の影響を与えることが示された。

#### ②男女別について

次に、全体では仮説が支持されたため、男女別に対象関係尺度が自立尺度を媒介し、親準備性に影響を与えるかどうかについて共分散構造分析を行った。その結果、女子では成立し、男子では不成立となっ

Table 3. 下位尺度得点の記述統計量 (N=262)

		平均値	標準偏差	最小値	最大値
対象関係 (6)	親和不全	3.29	0.99	1	5.83
	関係希薄	2.63	0.88	1	5
	自己中心	2.49	0.84	1	5.4
	一体希求	2.41	0.85	1	5
	見捨て不安	3.67	1.04	1	6
自立 (5)	セルフコントロール	3.59	0.63	1.46	5
	自立的な生活	2.66	1.44	1	5
	社会的関心	2.50	0.85	1	5
親準備 (5)	親意識	4.62	0.40	1.57	5
	親意義	3.80	0.76	1.44	5
	親負担	4.12	0.69	1.75	5

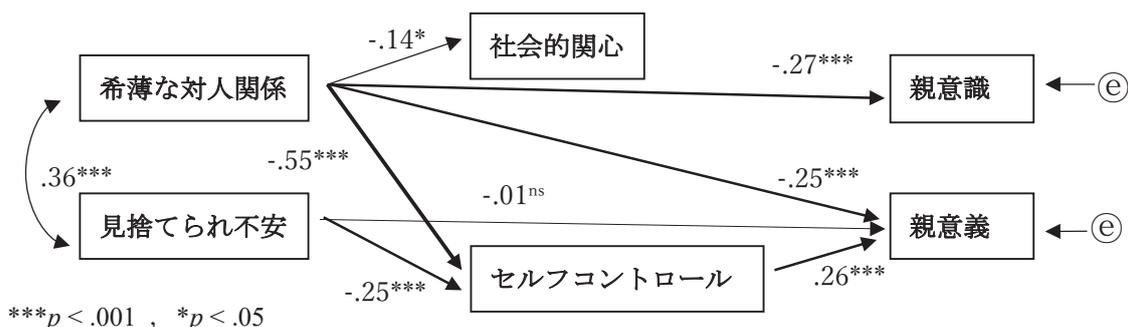


Figure. 1 対象関係が自立を媒介として親準備性に与える影響

た。そのため、男子は対象関係尺度を独立変数、自立尺度と親準備性尺度を従属変数とし、再度共分散構造分析を行ったところ成立した。

まず、全体のモデルに近い女性から述べる。青年期の女性では有意でないパスを削除し、最終的にFigure 2に示すモデルを採用した。モデルの適合度は十分な値を示した (CFI=1.00, RMSEA=0.00)。青年期の対象関係尺度における「希薄な対人関係」は大学生の自立尺度の「セルフコントロール」 ( $p < .001$ ) に負の影響を与えることが示された。また、青年期の対象関係尺度における「見捨てられ不安」は大学生の自立尺度の「セルフコントロール」 ( $p < .001$ ) に負の影響を与えることが示された。そして、大学生の自立尺度における「セルフコントロール」は親準備性尺度の「親になることの意義」 ( $p < .001$ ) に正の影響を、「親になることへの負担感・不安感」 ( $p < .05$ ) に負の影響を与えることが示さ

れた。さらに、青年期の対象関係尺度における「希薄な対人関係」は親準備性尺度の「親になることの意義」 ( $p < .001$ ) に負の影響が、「親になることへの負担感・不安感」 ( $p < .05$ ) に負の影響を与えることが示された。加えて、青年期の対象関係尺度における「見捨てられ不安」は、親準備性尺度の「親負担」 ( $p < .10$ ) に正の影響を与える傾向があることが示された。

続いて、仮説モデルが成立しなかった男性について述べる。青年期の男性では有意でないパスを削除し、最終的にFigure 3に示すモデルを採用した。モデルの適合度は十分な値を示した (CFI=1.00, RMSEA=0.00)。青年期の対象関係尺度における「見捨てられ不安」は大学生の自立尺度の「セルフコントロール」 ( $p < .001$ ) に負の影響を与え、親準備性尺度の「親になることへの負担感・不安感」 ( $p < .001$ ) に正の影響を与えることが示された。また、

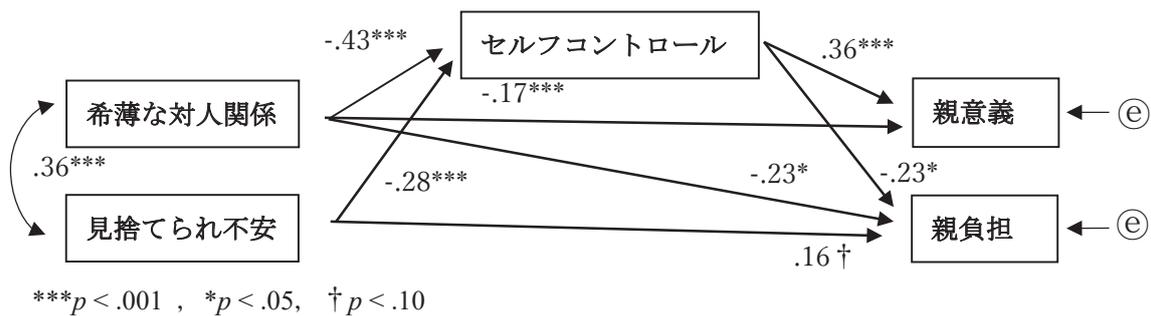


Figure. 2 青年期の女性の対象関係が自立を媒介として親準備性に与える影響

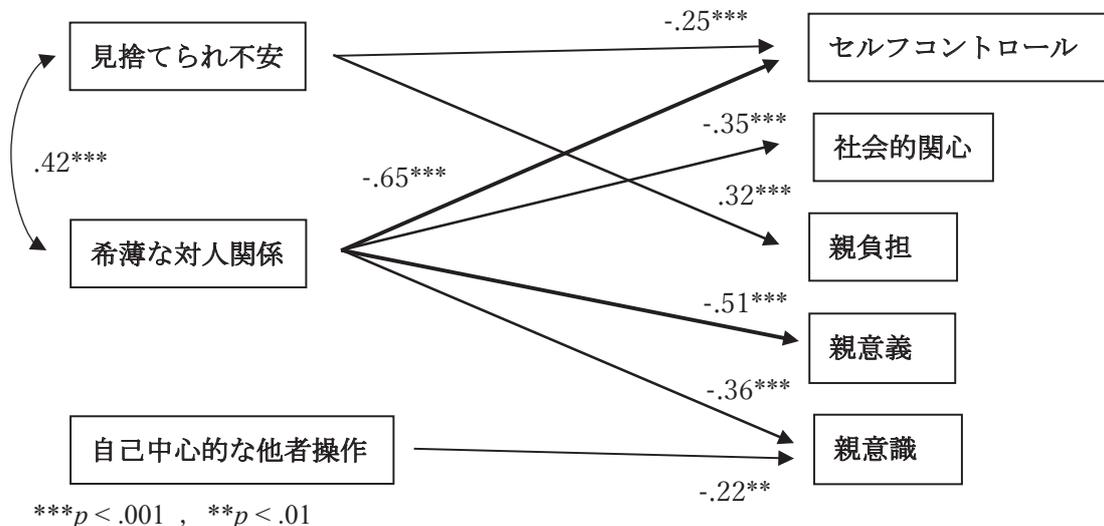


Figure. 3 青年期の男性の対象関係が自立を媒介として親準備性に与える影響

青年期の対象関係尺度における「希薄な対人関係」は大学生の自立尺度の「セルフコントロール」( $p < .001$ )と「社会的関心」( $p < .001$ )に負の影響を与え、親準備性尺度の「親になることの意義」( $p < .001$ )と「親になるための意識」( $p < .001$ )に負の影響を与えることが示された。さらに、青年期の対象関係尺度における「自己中心的な他者操作」は親準備性尺度の「親になるための意識」( $p < .01$ )に負の影響を与えることが示された。

## V. 考察

### (1) 青年期の親準備性に影響を与えるものについて

本研究では、大学生の重要な他者（親子関係だけでなく、友人や恋人など）との関係が自己の確立や自立を媒介にして、親になることの意識へ及ぼす影響について検討を行った。その結果、希薄な対人関係を持っているという認識や見捨てられ不安が高いと、親準備性が阻害されるが、セルフコントロールの高さが親準備性の阻害を和らげることが示された。そして、希薄な対人関係は社会的関心を低めることが示された。対象関係と自立においては、見捨てられ不安が高いことや対人関係の希薄さがセルフコントロールを阻害し、対人関係の希薄さが社会的関心を低めることが示された。また、対象関係と親準備性において、希薄な対人関係や自己中心的な他者操作、見捨てられ不安が親準備性を阻害していることが示唆された。これらの結果より、こまった時に助けてもらえるような対人関係を築くことが出来たり、人を大切に思うことができたりすると、他者に目を向ける余裕を持つことが出来るようになる可能性が考えられる。それは、他者からお世話をしてもらわなければ生きていくことができない存在に対して、肯定的に捉えることにつながるのではないだろうか。しかし、人のことを大切に思うだけでは、自分の言うことを聞いてくれないこともある子どもを育てたいと思うために、十分ではないかもしれない。そこで、安定した対人関係を形成し、自分の感情を自分自身でコントロールできたり、社会の中で生きている自分というものを認識することができたりすると、自分が親になることについてより肯定的に想像することができるのではないかと考えられ

る。また、中嶋・後藤（2009）は、子育て経験のない青年では子育てへのイメージから親になることへの意識が形成されているために、子育てを経験している男女に比べ、親になることへの意義よりも、子どもの養育や親になることへの要件などへの意識が高く、親になることへの負担感や不安感を抱いているという特徴が明らかになったと述べている。これにより、子育てのイメージについてより実際的なものにするすることで、親準備性が育まれる可能性があるのではないだろうか。以上のことから、青年期の段階で親準備性があまり育まれていなくても、変化する可能性があり、自立が一つの要素としてあるのではないかと考えられる。

### (2) 青年期の女性の親準備性に影響を与えるものについて

男女別の検討についてはまず、全体のモデルに近い女性から述べる。青年期の女性において、対象関係尺度を独立変数、大学生の自立尺度を媒介変数、親準備性尺度を従属変数とし共分散構造分析を行った。その結果、「見捨てられ不安（対象関係）」は「セルフコントロール（自立）」を低め、「親になることへの負担感・不安感（親準備性）」を促進することが示された。しかし、「セルフコントロール（自立）」は、「親になることへの負担感・不安感（親準備性）」を軽減していることが明らかになった。これは、親しい人から自分の意見や存在自体を受け入れてもらえないのではないかと不安に思っていると、自分の考えに自信を持つことが出来なくなり、自分で様々なことを考えて行動をしていかなければならない子育てを負担に思うのではないだろうか。けれども、居場所があると思えることや、親から信頼してもらえているという感覚を持つことができると、子育てを周りに助けてもらいながらやろうと思えたり、自分でも子育てができると思えたりするようになることもあるのではないかと考えられる。

結婚観や育児観をはじめとする人生観の変化や社会構造の変化から、青年期はプレ親期から自分自身の人生を模索する時期となりつつある。現代の大学生にとって、対象関係が安定したものとなっていると自立が促進されるため、パートナーと安定した関係を築くことが、大人への一歩なのかもしれない。

### (3) 青年期の男性の親準備性に影響を与えるものについて

続いて、仮説モデルが成立しなかった男性について述べる。青年期の男性において、対象関係尺度を独立変数、大学生の自立尺度を媒介変数、親準備性尺度を従属変数とし共分散構造分析を行った。その結果、対象関係が親準備性に影響を与える際に自立を媒介するという仮説が支持されなかった。これは、青年期の男性では、安定した対象関係をもとに大人として自立したとしても、子育てをしようとする意識に繋がらないのではないかと考えられる。

以下モデルの詳細について見ていく。「希薄な対人関係（対象関係）」は「社会的関心（自立）」を低めることが示唆された。安定した対象関係を持つことが出来ていると認識していると、その認識をもとに世の中や自分を取り巻く環境に目を向けることができるのではないかと考えられる。

また、「希薄な対人関係（対象関係）」や「自己中心的な他者操作（対象関係）」は「親になるための意識（親準備性）」を低めることが明らかになった。大切な人との安定した関係の築きにくさは、子育てへの気持ちを失わせたり、親になることに対してネガティブな感情を抱かせたりするかもしれない。そして、他者を自分の思い通りに動かそうとしてしまったり、自分の要求を適切に伝えることが出来なかつたりすることは大人になりきれない未熟性があるのではないかと考えられる。他者より自分を優先している人や自己完結してしまう人では、他者を気にする余裕を持つことが出来ないことで、自身が親になることにたどり着かないのではないだろうか。

以上のことから、青年期の男性の親準備性の特徴として、自立があまり影響しないことが明らかになった。男性は大人として自立したとしても、良い家庭をもつことや子育てをするイメージに繋がらない可能性が考えられる。また、2018年度の全国家庭動向調査（国立社会保障・人口問題研究所）によると、妻の家事の分担割合が8割以上となる世帯は29歳以下では61.1%であった。同様に、妻の育児の分担割合が8割以上となる世帯は29歳以下では68.2%であった。男性において自立が親準備性に影響を与えないことと合わせて考えると、子どもが生まれた

としても、自分自身の世話で精一杯であったり、家事や自分の身の回りのことをパートナーにやってもらいたいと思っていたりするように、子どもと自分を同じお世話をしてもらう存在であると見ることもあるのかもしれない。自分よりも子どものことを優先するといった世話をする人としての感覚は、経済的に家庭を支えたり、実際に子どもを世話したりする経験の中で生まれ、育まれていく場合もあるのではないだろうか。

男性の子育てへの見通しの持ちにくさに対して、学生の乳幼児ふれあい体験学習や職場で男性が育児参加できるワーク・ライフ・バランスの取り方を知る機会を作ること、子育てをしている先輩から実際の子育ての様子を聞く機会に心理職が介在するなどの心理教育をすることで臨床心理学が寄与できるのではないだろうか。

## VI. 今後の課題

本研究では、社会的関心と対象関係の関連については明らかになったが、社会的関心と親準備性との関連については解明されなかった。これは、社会的関心について政治や社会の出来事に関心があるかどうかと広く問いかけていたからではないだろうか。ジェンダー意識や少子高齢化など自立や親準備性に影響をもたらす社会的関心について検討していきたい。

また、親準備性が年齢や環境により変化する可能性があるため、大学生と社会人との違いや社会人の中でも育児経験の話を書く機会の有無の関連について検討していきたい。

さらに本研究では、対象関係と自立の因果関係について、親準備性への影響を考慮する場合、対象関係から自立に影響を与える仮説を想定し、成立した。親準備性への影響を考えない場合、自立から対象関係への影響についても検討していきたい。

## VII. 引用文献

- 服部律子. (2008). 親準備性尺度作成のための因子抽出の試み. 思春期学, 26(4), 428-432.  
藤山直樹. (2002). 対象関係. 小此木啓吾・北山修(編). 精神分析事典. 岩崎学術出版社. pp. 315-

- 316.
- 伊藤葉子. (2003). 中・高校生の親性準備性の発達. 日本家政学会誌, 54(10), 801-812.
- 井梅由美子. (2019). 大学生の結婚観, および子育て観について—自身の被養育体験, 父母との関係性, 対象関係に着目して—. 東京未来大学研究紀要, 13, 11-21.
- 井梅由美子・平井洋子・青木紀久代・馬場禮子. (2006). 日本における青年期用対象関係尺度の開発. パーソナリティ研究, 14, 181-193.
- 岩田崇, 秋山泰子, 井上義朗, 深谷和子. (1982). 青年期の親準備性に関する研究 (研究代表者 小林登, 「母子相互作用の臨床的・心理・行動科学的ならびに社会小児科学的意義」に関する研究), 昭和57年度厚生省心身障害研究報告書, 466-467.
- 川本哲也. (2015). 成人形成期のアイデンティティと複数の社会的関係性の関連: 養育者・友人・恋人に対するアタッチメント・スタイルの違いに注目して. 発達心理学研究, 26(3), 210-224
- 小林真. (2014). 認知された親子関係は大学生の親性準備性にどのような影響を及ぼすか. 富山大学人間発達科学部紀要, 8, 43-48.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2019). 2018年社会保障・人口問題基本調査 第6回全国家庭動向調査 結果の概要. [https://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ6/Kohyo/NSFJ6\\_gaiyo.pdf](https://www.ipss.go.jp/ps-katei/j/NSFJ6/Kohyo/NSFJ6_gaiyo.pdf)
- 内閣府 (2020). 子供・若者の意識に関する調査. <https://www8.cao.go.jp/youth/kenkyu/ishiki/r01/pdf/s2-7.pdf>
- 厚生労働省 (2013). 子ども虐待対応の手引き (平成25年8月改正版). [https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo\\_kosodate/dv/dl/130823-01c.pdf](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/dl/130823-01c.pdf)
- 黒谷万美子. (2011). 育児意識に関する一考察: 大学生における意識調査からの検討. 愛知学泉大学・短期大学紀要, 51-57.
- 松本奈巳・重橋のぞみ. (2018). 青年期女性における親性準備性と重要な他者との関連. 福岡女学院大学大学院紀要臨床心理学, (15), 15-22.
- 水本深喜, 山根律子. (2011). 青年期から成人期への移行期における母娘関係. 教育心理学研究, 59(4), 462-473.
- 水本深喜. (2018). 青年期後期の子の親との関係: 一精神的自立と親密性からみた父子・父娘・母子・母娘間差—. 教育心理学研究, 66(2), 111-126.
- 諸井克英・木村有花・長井佐哉香・堺かおる・西田郁美. (2013). 親との接触経験が親準備性傾向の形成に及ぼす影響: 女子青年の場合. 同志社女子大学学術研究年報, (64), 71-81.
- 中嶋律子・後藤宗理. (2009). 青年期の親準備性—子育て経験者との比較—. 名古屋市立大学看護学部紀要, 8, 9-14.
- 大石美佳・松永しのぶ. (2008). 大学生の自立の構造と実態: 自立尺度の作成. 日本家政学会誌, 59(7), 461-469
- 芹田真帆・宮崎圭子. (2019). 青年期女子の親準備性に関する研究—その影響要因の検討—. 跡見学園女子大学附属心理教育相談所紀要, 15, 139-151.
- 高峰彩華・吉川はる奈. (2015). 大学生が持つ子ども・子育てのイメージ形成に与える影響: 保育学習や友人関係による検討. 埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要, 14, 9-16.